



TITLE:

王粲詩について

AUTHOR(S):

下定, 雅弘

---

CITATION:

下定, 雅弘. 王粲詩について. 中國文學報 1978, 29: 46-81

ISSUE DATE:

1978-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177346>

RIGHT:

## 王粲詩について

下 定 雅 弘

京 都 大 學

一

王粲は、漢末魏初の所謂建安の七子を代表する人物である。<sup>(1)</sup> 文學者としては、建安の當時は、文帝の典論論文（文選卷五十二）に、「王粲は辭賦に長ず」と評價するように、賦の作者として盛名を馳せていたようであるが、詩においても劉楨と競いつつ七子の筆頭に位するとするのが文學史の常識であろう。確かに彼の詩作は建安詩に中心的位置を占めるのであり、王粲詩を語ることは、即ち建安詩の核心を語ることにつながる。いかなる意味においてそうであるのか、主題とそれを擔う表現の両面から考察するのが、小論の課題である。<sup>(2)</sup>

## 二

今日傳わる王粲詩の全體を見わたした時、結論を言えば、次のような基礎的主題、ならびにその連關と構造とを認めることができる。

その詩の主題の特質として第一に認めるべきは、治世への願望である。無論これは亂世への悲哀と言い換えてもよい。第二は、これを土臺とし、これと固く結びつきながら、亂世の現實への自己參與の願望を強く示すことであり、王粲の場合、この自己參與の願望は、即ち自己の才能活用への願望として現われている。そしてこの才能活用への願望の閉ざされている悲哀が、彼の場合、大部分は流寓漂泊の悲哀としてうたわれ、逆に曹操に仕えて以後の諸詩では自己奮勵の表現として現われる。但し、長期にわたる流寓の體驗は、奮勵の表現のうちにも刻印されていること後に述べるごとくである。以下、實例に即してそれを確認したい。

治世への願望（亂世への悲哀）を主題として最も鮮明な作は、七哀詩「西京亂無象」（「荆蠻非我郷」と共に文選卷二十三、藝文類聚卷三十四人部哀傷に所收）である。

西京亂無象 西京 亂れて象無く  
 豺虎方遺患 豺虎 方に患を遺う<sup>（かま）</sup>  
 復棄中國去 復た中國を棄てて去り  
 遠身適荆蠻 身を遠ざけて荆蠻に適く<sup>（あ）</sup>  
 親戚對我悲 親戚 我に對いて悲しみ  
 朋友相追攀 朋友 相い追いて攀る<sup>（すが）</sup>  
 出門無所見 門を出ずるに見る所無く  
 白骨蔽平原 白骨 平原を蔽う  
 路有飢婦人 路に飢えたる婦人有り  
 抱子棄草間 子を抱きて草間に棄つ  
 顧聞號泣聲 顧みて號泣の聲を聞くも  
 揮涕獨不還 涕を揮いて獨り還らず<sup>（かえ）</sup>

王粲詩について（下定）

未知身死處 未だ身の死する處を知らず  
 何能兩相完 何ぞ能く兩りながら相い完からん<sup>（ふた）</sup>  
 驅馬棄之去 馬を驅りて之れを棄てて去る  
 不忍聽此言 此の言を聽くに忍びず  
 南登霸陵岸 南のかた霸陵の岸に登り  
 迴首望長安 首を迴らして長安を望む<sup>（さうへ）</sup>  
 悟彼下泉人 悟りぬ 彼の下泉の人の  
 喟然傷心肝 喟然として心肝を傷ましむるを<sup>（きぜん）</sup>

詩は、一句より六句までは、動亂の長安を去って荊州に適こうとする王粲の姿を敘し、七句より十四句までは、城門を出て旅の途次に見た、飢えた婦人が子供を棄てるという漢末の民衆亂離の典型的情景を配置し、十五句より二十句までは、この情景と婦人の言葉に耐えきれず、馬を驅つて文帝の葬處霸陵に登り、現在の亂を悲しみつつ昔日の明君をしのぶ、という展開を見せる。十九句「下泉人」は、李善の言うように詩經曹風下泉に基づく語。周の京を念い、先王の明を思つて（鄭箋に據る）下泉を作した人の悲しみが、

今わかったというのである。

主題・構成・語句等、班彪の北征賦（文選卷九）より多くを攝取すること、伊藤正文氏の指摘されるとおり（中國文學報第二十冊「王粲詩論考」）。

以上を概括するに、この詩は確かに漢室の衰微した亂世への悲哀をうたっている。

但し、この概括は詩の一面を述べたに過ぎない。一句より六句の各句を見るに、ここには動亂の長安を去り難い王粲の心情が詠みこまれている。一・二句には、董卓の部將、李傕・郭汜<sup>かくはん</sup>らへの怒りが讀みとれるし、三・四句の「復業」、「遠身」の語には、流寓を厭う作者の心情が示されている。また、五・六句で別れを傷むのは「親戚」、「朋友」であるが、その心情は無論詩人自身のものでもある。

七句から十四句の飢えた婦人が子供を棄てるという中段の情景は、先行する文學的素材として、東門行（宋書樂志三、樂府詩集卷三十七）、婦病行（樂府詩集卷三十八）、孤兒行（同上）等の民間樂府古辭の系列が想定されること、鈴木修次氏が既に指摘され（東京教育大學文學部紀要國文學漢文學論叢、昭

和三十三年三月、「建安詩を方向づけるもの」、また「漢魏詩の研究」、伊藤氏も觸れられる（前掲論文）。だが、この中段は、おそらく單に民衆亂離の典型的情景として配置したのではないだろう。私は、棄ててはならぬ子供を棄てねばならぬ追ひ詰められた婦人の情況に、棄て難い長安（亡びんとする漢室）を棄てていく王粲自身の境遇と傷みとを寓意しているものと思う。

だからこそ詩人は、婦人の言葉を聴くに忍びず、馬を驅つて之れを棄てて去る、のである。そして、ここまでに三たび繰り返される「棄」の語が、棄て難い切なさを増幅していく結果として、再度長安を望み見るのである。つまり、十五句より二十句は、動亂の克服への參與を願う詩人の意識の、自己確認の表現としての性質をも持っているであろう。

つまり、この詩の主題をより十全に概括すれば、長安を去ろうとして去り難い王粲の意識と行動の展開を通じての、漢室衰亡への悲哀の歌と言い得るであろう。

この詩が、治世への願い（亂世への悲哀）を中心主題とするのとは異なり、生地<sup>きぢ</sup>に喩えれば地柄<sup>ぢがら</sup>のようになって、亂世への悲哀の表現が、詩の情調に深みと廣がりをも與えているものに、文選卷二十三により傳わる四言の贈答詩三首がある。

都落ちの哀愁と無聊の中、王粲をみま<sup>みま</sup>った三つの離別、うち特に贈蔡子篤詩、贈士孫文始二首の離別の悲哀の切切たること、文選卷二十九に蘇武・李陵の間に交わされたものとして傳わる一群の五言詩に劣らない。だが、これらの詩における離別の哀傷の表現との最も顯著な相違は、王粲のそれが時代の荒涼をうたうことにより、古詩における逐臣棄婦の哀傷の、主として個人に關わるそれを、遙かに廣い舞臺の中に展開している點にあるだろう。

今それを贈蔡子篤詩について見れば、この詩の起二句、翼翼飛鸞、載飛載東、翼翼たる飛鸞、<sup>すなわ</sup>載ち飛び載ち東す、の「飛鸞」とは、李善が言うように子篤を喩えるものであるが、その鸞が飛んで逝くとは、例えば、「鸞鳥鳳皇日に以て遠し」（九章涉江、王逸注、「鸞鳳は俊鳥なり。聖君有れば

則ち來たり、德無ければ則ち去る。」とあるごとく楚辭の用法に基づき、賢臣が世亂れて時を得ぬことの比喻表現である。そしてこの亂世の表現は、以下の句、七・八句、蔚矣荒塗、時行靡通、蔚たり荒れたる塗、<sup>みち</sup>時に行くも通ずる靡し、また十一・十二句、悠悠世路、亂離多阻、悠悠たる世路、亂れ離れて多く阻たれり、<sup>むか</sup>において一層鮮明である。

## 11611

治世への願望（亂世への悲哀）を繰り返しうたうこと、しかしそれは王粲詩においてのみ特に際立つ現象ではない。後にも述べるごとく、それは建安詩に通有の特性である。王粲詩を王粲詩たらしめている一層顯著なものは、この亂世の現實への自己參與の願望であり、それも自己の才能活用・官途への強い希求として一貫することである。この希求が、曹操に仕える以前の流寓漂泊の悲哀、また曹操に仕えて以後の自己奮勵の熱意の表現を生み出している。

1161161

流寓の悲哀は、先に擧げた七哀詩其一にも現われていた。その内實は衰亡する漢室を見棄て得ぬ煩悶であり、ここにも亂世の現實への自己參與の熱意を見ることができた。

そして、七哀詩其二「荆蠻非我郷」は、自己の才能活用への願望を閉ざされた悲哀をより端的に表現する。<sup>(5)</sup>

荆蠻非我郷 荆蠻は我が郷に非ず

何爲久滯淫 何爲れぞ久しく滯淫せん

方舟溯大江 舟を方べて大江を溯り

日暮愁我心 日暮れて我が心を愁えしむ

山崗有餘嘆 山崗には餘嘆有り

巖阿增重陰 巖阿には重陰増せり

狐狸馳赴穴 狐狸は馳せて穴に赴き

飛鳥翔故林 飛鳥は故林に翔ける

流波激清響 流波は清響を激しくし

猴猿臨岸吟 猴猿は岸に臨みて吟く

迅風拂裳袂 迅風 裳袂を拂い

白露霑衣衿 白露 衣衿を霑す

獨夜不能寐 獨夜 寐ぬる能わず

攝衣起撫琴 衣を攝り起ちて琴を撫す

絲桐感人情 絲桐 人の情に感じ

爲我發悲音 我が爲に悲音を發す

羈旅無終極 羈旅 終極無く

憂思壯難任 憂思 壯んにして任え難し

時は日暮から夜、船上にあって、船べりより知覺される自然の景物の敘述を中心として、この詩の漂泊の悲哀はうたわれている。

七哀詩其一が、亂世の現實への自己參與の意識の明晰化という、一つの過程を構成していたのに似て、この詩もまた、その妙味は各句の周到な積み重ねにあり、悲哀を起伏をもった心理過程として描き出していること第四章に詳論する。

やはり才能活用への願望に基づき、漂泊からの脱却の感慨をうたったと思われるのが、古文苑卷八、藝文類聚卷九十二鳥部鳩により傳わる雜詩「鷺鳥化爲鳩」(藝文作魏王粲詩曰)である。

鷺鳥化爲鳩 鷺鳥 化して鳩と爲り  
遠竄江漢邊 遠く江漢の邊に竄る  
遭遇風雲會 風雲の會に遭遇し  
託身鷺鳳間 身を鷺鳳の間に託す  
天姿既否戾 天姿 既に否(さから)い戾(もと)り  
受性又不閑 受けし性 又閑ならず  
邂逅見逼迫 邂逅して逼迫せられ  
俛仰不得言 俛仰して言うを得ず

この詩、やや分りにくいだが、私は以下のように讀む。一  
二句は、長安より荊州へ避難して、忠正剛直だった王粲  
がうわついた小利巧な人間になってしまったといひ、三・  
四句は、時來たりて、鷺鳳<sup>(8)</sup>―即ち曹操―に巡り合えたこと

王粲詩について(下定)

をうたい、五・六句は、多年の流寓生活により傷めつけられてしまった自己(天姿は、直接には鷺鳥を指すだろう)、また自己の生來の性質もすなおものでないことを、曹操への謙讓の意を含めて詠む、そして七・八句では、曹操に仕えるようにせまられ、とまどいと感激に言葉もない自己を表現する。即ち、この詩は曹操に仕えるまでの彼の人生の比喩的なデッサンであり、流寓からの脱却の感慨をうたっているものと思う。

他にも、一々は述べないが、四言贈答詩三首は、特にその贈蔡子篤詩、贈士孫文始の二首は、流寓を背景とした離別の悲哀であることによって、孤獨と不安が一層の深みをもつことになっている。

また以下に述べるごとく、從軍詩にも流寓體驗は刻印されているのであって、この主題は彼の詩作の全體を覆うものである。

## ==|||==

曹操に仕えて以後の諸作では、流寓の境涯に發する諸作

に比べて、具體的な對象（曹操）を得たことにより、才能活用への希求の表現は一層鮮明となる。うち雜詩「日暮遊西園」（文選卷二十九、藝文類聚卷二十八人部遊覽）の「悲、哀のうたであることに傾き、他の公讌詩及び從軍詩諸作は、彼の才能活用への熱情で活氣に溢れている。

日暮遊西園 日暮れて西園に遊び

冀寫憂思情 憂思の情を寫かん（10）と冀う

曲池揚素波 曲池 素き波を揚げ

列樹敷丹榮 列樹 丹き榮を敷く

上有特棲鳥 上に特り棲む鳥有り

懷春向我鳴 春を懷いて我に向かいて鳴く

褰衽欲從之 衽を褰げて之れに従わんと欲するも

路嶮不得征 路 嶮しくして征くを得ず

徘徊不能去 徘徊して去る能わす

佇立望爾形 佇立して爾が形を望む

風飈揚塵起 風飈 塵を揚げて起り

白日忽已冥 白日 忽として已に冥れぬ

迴身入空房 身を廻らして空房に入り

託夢通精誠 夢に託して精誠を通ぜんとす

人欲天不違 人 欲すれば天違わす

何懼不合并 何ぞ合併せざるを懼れんや

この詩を読む限りでは、詩の主題は孤鳥と睦み得ぬ詩人の悲しみということである。

しかし、伊藤氏の既に指摘されるように（前掲論文、ならびに中國詩人選集「曹植」四十六頁）、この詩は曹植の贈王粲（文選卷二十四）と句づくりを殆ど同じくする。兩詩をあわせ讀めば、樹上の孤鳥は王粲を慰撫しようとする曹植を喩えるのであり、侍中昇進（建安十八年）以前の彼の職掌への不滿を背景として作られたものであることがわかる。

憂いのうたとは言え、その憂いは流寓時のような激越なものではない。雜詩「吉日簡清時」、「列車息衆駕」（藝文類聚卷二十八人部遊覽、古文苑卷八）の二首を見ても分かるように曹操幕下に入ってようやくかんだ境遇を喜びとしつつも、しかしそれに自足するのではなく、更に最大限自己



の力量を發揮したい、より高い官位につきたいと、煩悶する王粲の姿を我々はここに見る。

公讌詩（文選卷二十、藝文類聚卷三十九禮部燕會）、從軍詩の諸作の主題を構成する基本的な要素と展開は、曹操賛美と自己奮勵、あるいは軍旅の憂愁と自己奮勵の表現である。公讌詩もその骨格は從軍詩の前者の傾向と等しいから、公讌詩は略し、從軍詩を對象として論を進める。

從軍詩は、文選卷二十七その他に五首が傳わるが、その表現の傾向は、曹操賛美ないし軍の威容の表現と、軍旅の憂愁という點では、從軍を素材とする他の建安の賦（主として軍の威容をうたう）・樂府（主として軍旅の苦しみあるいは憂愁をうたう）をも含めた諸作とほぼ共通する。しかし自己奮勵の熱意の表現は、王粲の從軍詩の個性と認めるべきであり、また軍旅の憂愁も、建安の他の諸作とひとしなみには扱えないものを含む。

五首のうち前段に曹操賛美、後段に自己奮勵の熱意の表現を配して征旅の意氣を昂めるのは、其一と其四である。

王粲詩について（下定）

今句數の短い其四を示す。

朝發鄴都橋	朝に鄴都の橋を發ち
暮濟白馬津	暮に白馬の津を濟れり
逍遙河堤上	河堤の上を逍遙し
左右望我軍	左右に我が軍を望む
連舫踰萬艘	連舫萬艘を踰え
帶甲千萬人	帶甲千萬人
率彼東南路	彼の東南の路に率い
將定一舉勦	將に一舉の勦を定めんとす
籌策運帷幄	籌策を帷幄に運らすは
一由我聖君	一えに我が聖君に由る
恨我無時謀	恨むらくは我時の謀無く
譬諸具官臣	諸を具官の臣に譬えられんことを
鞠躬中堅內	中堅の内に鞠躬するのみにして
微畫無所陳	微畫だに陳ぶる所無し
許歷爲完士	許歷は完士爲りて
一言獨敗秦	一言もて獨り秦を敗れり

我有素餐責 我に素餐の責有り

誠愧伐檀人 誠に伐檀(16)の人に愧ず

雖無鉛刀用 鉛刀の用無しと雖も

庶幾奮薄身 庶幾(17)わくは薄身(18)を奮わんことを

詩は前半十句で軍の威容、曹操の武威を賛え、後半十句で自己の非才を歎きつつ、それを乗り超えて是が非でも力を發揮したいとの決意をうたう。

このうたいぶりのうち、前半の軍の威容を賛える所は、從軍を扱った他の建安の諸作と特に異ならない。しかし、この詩では後半の全てを占める自己の非才の表現、また盡力を誓う表現、これは建安の諸作に王粲のごとく顯著に見出だされるものではない。

從軍詩其一も相似た表現を結びに配する。

竊慕負鼎翁 竊(19)かに負鼎(20)の翁を慕い

願厲朽鈍姿(21) 願わくは朽鈍(22)の姿を厲(23)まさんことを

不能效沮溺 沮溺(24)に效(25)いて

相隨把鋤犁 相隨(26)いて鋤犁(27)を把(28)る能わす  
孰覽夫子詩 夫子の詩を孰覽(29)するに  
信知所言非 信(30)に言う所の非なるを知る

隱棲は願わず、かの伊尹のごとく君に仕えて、王道實現の爲力を盡くすことこそ自分の望みであることをうたう。其二の結びも次のごとく言う。

懼無一夫用 懼(31)るるは一夫の用の

報我素餐誠 我が素餐の誠に報ゆる無からんことを

夙夜自忬性 夙夜(32)に自ら忬(33)性(34)し

思逝若抽縈 逝(35)かんことを思(36)うは縈(37)を抽(38)くが若し

將秉先登羽 將(39)に先登の羽を秉(40)らんとす

豈敢聽金聲 豈(41)敢えて金聲を聽(42)かんや

一番乗りの旗を手を持ちたい、退却の鐘の音なぞ聞くものか、と、誠に意氣盛んである。

かく繰り返し表明される熱情が、あの長期にわたる流寓

體驗と無縁ではあり得ないこと、一般論として推察させるのであるが、其三と其五には、作品自體のうちに流寓體驗が刻印されていて、彼の精神の相貌をより深く表現している。まず其三を見よう。

從軍征遐路 軍に従いて遐路を征き

討彼東南夷 彼の東南の夷を討たんとす

方舟順廣川 舟を方べて廣川に順い

薄暮未安坻 薄暮なるも未だ坻に安んぜず

白日半西山 白日 西山に半ばにして

桑梓有餘暉 桑梓に餘暉有り

蟋蟀夾岸鳴 蟋蟀は岸を夾みて鳴き

孤鳥翩翩飛 孤鳥は翩翩として飛ぶ

征夫心多懷 征夫 心に懷多し

悽愴令吾悲 悽愴として吾をして悲しましむ

下船登高防 船より下りて高防に登れば

草露沾我衣 草露 我が衣を沾す

迴身赴牀寢 身を迴らして牀寢に赴く

王粲詩について（下定）

此愁當告誰 此の愁い當に誰にか告ぐべき  
身服干戈事 身は干戈の事に服す

豈得念所私 豈 私する所を念うを得んや

即戎有授命 戎に即きて命を授くる有り<sup>(19)</sup>

茲理不可違 茲の理 違う可からず

詩は中段に征夫の郷愁の情を配し、結びでそれを振りはらって軍務に精勵しようとの決意を述べる。其二も、征夫の郷愁を中段に配し、奮勵の決意を述べる點では同じであるが、これは曹操の苦寒行（宋書樂志三、文選卷二十七、皆武帝作。藝文類聚卷四十一、樂府詩集卷三十三、皆文帝作）、曹丕の至廣陵於馬上作（魏志文帝紀黃初六年裴注）と同じく、詩經幽風東山にうたわれた軍旅の苦しみを織り込んで作りあげたものであり、この征夫の郷愁の表現そのものには、特に王粲の個性を見出だすことはできない。

しかし、其三中段にうたわれる征夫の郷愁には、王粲自らの流寓體驗への回憶が含まれていると思われる。そう考えるのは、實はこの詩の征夫の郷愁は、七哀詩其二の中段

の表現と殆ど全く同一であり、從軍詩の主題に即して語句上の變型を僅かに行なったものに他ならないからである（七哀詩其二の製作時期を決めることは困難だが、從軍詩より前とするのは許容される設定であらう）。それを示すために、上段に七哀詩其二の、下段に從軍詩其三の中段を掲げよう。

七哀詩

- 3 方舟溯大江
- 4 日暮愁我心
- 5 山崗有餘暎
- 6 巖阿增重陰
- 7 狐狸馳赴穴
- 8 飛鳥翔故林
- 9 流波激清響
- 10 猿猿臨岸吟
- 11 迅風拂裳袂
- 12 白露霑衣衿
- 13 獨夜不能寐

從軍詩

- 3 方舟順廣川
- 4 薄暮未安眠
- 5 白日半西山
- 6 桑梓有餘暎
- 7 蟋蟀夾岸鳴
- 8 孤鳥翩翩飛
- 9 征夫心多懷
- 10 悽愴令吾悲
- 11 下船登高防
- 12 草露沾我衣
- 13 迴身赴牀寢

14 擗衣起撫琴

14 此愁當告誰

相違としては、七哀詩の七句から十句が、從軍詩では七・八句に壓縮され、かわりに九・十句にはっきりと征夫の悲哀を述べる點、十一句、十四句の違い、語の若干の差し替え、順序の變更が認められる。語の差し替えについて言えば、例えば第六句の「桑梓」とは、小雅節南山之什小弁に「維れ桑と梓と、必ず恭敬す」とあるのに基づき、父母の恩愛を、また郷里への懷いをよびおこす語である。第十句「悽愴」（李善注本は、惻愴とする。六臣注本に従う）の語も、李善は禮記祭義に「霜露既に降れば、君子之れを履みて、必ず悽愴の心有り（以上、李善の引用）。其の寒きの謂にあらざるなり。」とあるのを引くが、鄭注に據れば、これも「悽愴及び怵惕は、皆時に感じて親を念うが爲なるを謂うなり」ということであり、征夫の郷愁という中段の主題に副うように語の變更は行なわれている。

しかしながら、こうした相違を除けば、この二首の各句は、殆ど同じ表現をとる。これに續く結びの四句によって、

兩者の主題、即ち流寓の悲哀と、私情を振りはらって軍務に勵もうとする思い、との相違が決定されているのである。

だから、詩の表面は征夫の郷愁を振りはらって軍務に勵もうとする氣持をうたっているのではあるが、この時彼の心中には七哀詩其二に結晶しているあの沈鬱な流寓の境涯への回憶があつたであらう。來しかたの苦しみを顧みつつ、それを思えば思うほどに今こそ力を盡くさねばならぬと、自らを勵ます王粲の姿を、我々はここに見る。

從軍詩の其五も、流寓體驗を表現して其三より一層鮮明である。但し、この詩の場合、奮勵の決意ではなく曹操の贊美へとつながっており、以上に擧げてきたいずれの詩とも異なる情調を示す。これまでの詩は、悲哀にせよ熱情にせよ、皆緊張に満ちているが、この詩はそうではない。ここには治世を願い、明君を求め、自己の才能活用のを求めて一筋に生き抜いてきた王粲の到達點を見ることができ

悠悠涉荒路 悠悠として荒路を涉<sup>わた</sup>り

王粲詩について（下定）

靡靡我心愁 靡<sup>び</sup>靡として我が心愁う

四望無煙火 四望するも煙火無く

但見林與丘 但だ林と丘とを見るのみ

城郭生榛棘 城郭は榛棘<sup>しんきよく</sup>を生じ

蹊徑無所由 蹊徑<sup>けいけい</sup> 由る所無し

薜蒲竟廣澤 薜蒲<sup>かんぽ</sup>は廣澤<sup>わた</sup>に竟り

葭葦夾長流 葭葦<sup>かい</sup>は長流<sup>はさ</sup>を夾めり

日夕涼風發 日の夕に涼風<sup>ぞこ</sup>發り

翩翩漂吾舟 翩翩<sup>へんべん</sup>として吾が舟を漂わす

寒蟬在樹鳴 寒蟬<sup>かんせん</sup>は樹に在りて鳴き

鸛鵒摩天遊 鸛鵒<sup>かんとく</sup>は天を摩して遊ぶ

客子多悲傷 客子 悲傷多く

淚下不可收 淚下りて收む可からず

朝入譙郡界 朝に譙郡<sup>しやう</sup>の界に入れば

曠然消人憂 曠然<sup>こうぜん</sup>として人の憂い消ゆ

雞鳴達四境 雞鳴は四境に達し

黍稷盈原疇 黍稷<sup>しよしよく</sup>は原疇<sup>げんちゆう</sup>に盈てり

館宅充廩里 館宅<sup>てんち</sup>は廩里<sup>りんり</sup>に充ち

女士滿莊廬 女士は莊廬<sup>そうき</sup>に滿つ

自非聖賢國 聖賢の國に非ざる自りは

誰能享斯休 誰か能く斯の休<sup>やすみ</sup>きに享<sup>あた</sup>らん<sup>(20)</sup>

詩人美樂土 詩人は樂土を美<sup>よ</sup>せり

雖客猶願留 客と雖も猶も留まらんことを願う

この作の前半十四句は、第十五句に、朝入譙郡界、とあるのを見れば、まずは軍旅の途次の荒漠と哀傷をうたったものと読み得る。が、單に行旅の哀傷とするには、その哀切はあまりに深く、從軍詩其三と同じく、ここには曹操に出會うまでの彼自身の苦しかった人生が重ねられているであらう。

例えば、第一句、悠悠涉荒路、は、類似する句を、王粲贈蔡子篤詩の七句、蔚矣荒塗、蔚たり荒れたる塗、同十一句、悠悠世路、悠悠たる世路、等に見出ですが、これらは二章一節に述べたように亂世を示す表現である。詩の始め數句の荒漠たる情景は、單に征吳の途次のそれではなく、漢室の衰微した亂世をあてど無く旅してきた王粲の心情を

も含んだ表現であると思われる。

また、九・十句、日夕涼風發、翩翩漂吾舟、は、七哀詩其二の三・四句でうたわれ、從軍詩其三の三・四句が引き繼いでいる、宿るべき日暮に船上にあって漂う、という、王粲獨自の漂泊のモチーフであり（四章一節参照）、ここにも單に征旅の哀愁ではなく、荒涼たる時代を、また世界を漂泊してきた王粲の心情が重ねられていると思われる。

更にまた、十一・十二句、寒蟬在樹鳴、鸛鵒摩天遊、の表現は、詩中最も悲しみの突き詰められた表現であって、十二句は李善の引くごとくおそらく古歌烏生八九子（宋書樂志三、また太平御覽卷九一六鸛部に、魏武樂府曰として次の二句のみを擧げる）に基づいているであらうが、そこには「黃鸛は天を摩し高きを極めて飛ぶも、後宮尙お復た之れを烹煮<sup>し</sup>するを得」と、天高くはばたくおとりも人に捕えられて死ぬべき運命を免れないことをうたう。即ち、短い命を擔ってひたすらに鳴く寒蟬も、はばたく力を誇示するがごとく天に向かう鸛鵒も、いずれは同じく死を免れないことを、この二句はうたうであらう。この絶望にも似た心情の

表現は、流寓のうちに遂に朽ちてしまふかも知れぬ自らの運命への暗澹たる心象として、ここに配されたのではなかったか。

以上、十一・十二の二句が何を示すかについては、なお推測の域を出ないとしても、十四句までの表現が、自らの歩んできた亂世の荒漠と流寓の哀傷を重ねてうたうものであることは、ほぼ疑いないであろう。しかしそれは、この詩においては後半十句と對照を爲し、後半を引き立たせるものとして配置されている。

十五・十六句、朝入譙郡界、曠然消人憂、そうした悲しみの日々も、曹操の故郷譙に入るとカラリと晴れた。以下雞の鳴き聲、黍稷の實り、街の繁榮をうたい、曹操の治世を賛美して、前段の悲哀は後段の喜びを鮮明にしている。

即ち、この詩の後段は、他の從軍詩四首に見られた自己奮勵の表現ではなく、また悲哀の詩を通じて王粲の殆ど全ての詩に見られる、情調としての緊張を示さない。換言すれば、詩の全體が示す情調は、一種の安寧とも言うべきもの、掙扎の軌跡の果てに點ぜられた唯一の安寧なのであ

王粲詩について（下定）

る。<sup>(21)</sup>とは言え最後の句、雖客猶願留、を見れば、この樂土に留まりたいと願った彼は、なお自らを旅の人、異郷の人とする。この詩もまた漂泊の旅人たる王粲の姿を搖曳させている。

從軍詩は、曹操への「諛辭」的性格が強いとして、その評價を低めるのは一つの有力な流れである。しかし、宋人葛立方、嚴羽らの意見は、曹操を姦臣と見る立場から、そういう人物をたたえる王粲の節操を批判するものであって、これにとらわれる必要はない。問題は詩に表現された感情の眞實性であって、私は、伊藤氏の言われるような「主體性を缺いた態度と、詩精神自體の衰退」（前掲論文）を從軍詩に見ない。ここにあるのは、ほぼ二十年の長きにわたって閉ざされていた、この以前には激しい悲哀として噴出させるより仕方の無かった、彼の熱情の率直な發露であると思う。從軍詩の其三は、流寓體驗が當時の彼になお深く刻印をとどめていることを示していた。從軍詩其五も、やはり流寓體驗を振り返りつつ、今日にまで至った自らの人生

をやすらぎをもって眺めている。この二首は、彼の熱情の眞率さを照らし出している。<sup>(23)</sup>

更に今一つ、建安詩は、従前は民間のものであつた五言詩を、王侯士大夫の想念の表白の具として定着展開させていく時期である。なお少なからぬ古詩・民歌の模擬繼承作のある中で、士大夫の文學傳統たる賦の素材を五言詩に導入した功績はもとよりのこととして、従軍の作が通常持つ節度を破ってまでのこの自己表白性の高さは、文人の五言詩の展開へ重要なエネルギーを注ぎ込んでいるものと評價し得る。

### 三

以上、王粲詩における基礎的テーマならびにその連關と展開について考察してきた。以下、こうした主題が建安詩の中でどのような位置を占めるのかについて考えてみたい。

### III-1

まず詩の主題の具體性に即して考えてみよう。

第一に、「治世への願い（亂世への悲哀）」という點では、三曹、劉楨、阮瑀、陳琳、應瑒<sup>(24)</sup>（要するに徐幹の詩作を除くのみ）らの詩作もまた、それを示す表現を持つのであつて、これは單に王粲一人の特質ではなく、建安詩全體の主題の一つの土臺とも言えるものである。その表現は四言により多く見えるが、五言詩でも、曹操の薤露、蒿里（共に宋書樂志三、樂府詩集卷二十七）を始めとして少なからぬ作に見出だし得る。

第二に、「現實への自己參與の熱意」の内實と方向の點ではどうであろうか。王粲詩においては、自己の才能活用への願望、またそれを果たし得る明君と地位への希求として一貫しているのであるが、これは建安の諸詩に共通する傾向ではない。

例えば阮瑀。その詩を読むに、彼もまた亂世を憂え、自らの關わりようを眞劍に考え續けていた。しかしながら、阮瑀は王粲のごとき才能活用への熱意は示さない。亂世の苛酷な現實の前に腕くような苦しみを抱きつつ、彼は立ち



盡くしている。拙稿「阮瑀の五言詩について」（中國文學報第二十四冊）を参照。

また王粲と並び稱される劉楨も、今日傳わる詩作を見る限りでは、自己の才能活用への熱意を示さない。

贈五官中郎將四首（文選卷二十三）が示すのは、病を得た彼の、昔日の歡遊のきらめきへの回憶であり、生きる方向として求めていたものは、王粲のごとく具體的な才能活用の場や地位ではなく、より抽象的な人間としてのありようである。贈從弟三首（文選卷二十三）は、そうした彼の精神を窺わせる。舉例するのは、その第二首である。

亭亭山上松　亭亭たり山上の松  
瑟瑟谷中風　瑟瑟たり谷中の風  
風聲一何盛　風の聲の一に何ぞ盛んなる  
松枝一何勁　松の枝の一に何ぞ勁き  
冰霜正慘悽　冰霜は正に慘悽たるも  
終歲常端正　歳を終えて常に端正なり  
豈不羅凝寒　豈　凝寒に羅わざらんや

王粲詩について（下定）

松柏有本性　松柏　本性を有てり

吹きつける風、冷たい霜にも、常に端然と強く立つ松の姿。従弟を勵ましたものではあるが、それは劉楨が自らの生きる姿として理想とするものであったに違いない。

この二者に比べれば共通性の高いのは、三曹及び陳琳、應場である。但し、曹操、曹丕の場合は、同じく自己の力を發揮しようとする熱意を示しても、それは治者の抱負としての特殊性を持っており、王侯ではあるが曹植、七子（孔融を除外する）の中では陳琳、應場の諸詩が、最も王粲詩に近似する。

この三者は、自己の才能活用への望みと、その果たされぬ所より生まれる漂泊の悲哀という點で、王粲詩と同質のものを示している。

曹植には、天下一統の事業に身を奉じ力を盡くそうとの思いを示す詩が見られる。その數は必ずしも多くないが、文選卷二十九所載雜詩六首の其五は、典型的なものの一つである。

僕夫早嚴駕 僕夫 早に駕を嚴め

吾將遠行遊 吾 將に遠く行きて遊ばんとす

遠遊欲何之 遠遊して何く之かと欲す

吳國爲我仇 吳國 我が仇爲り

將騁萬里塗 將に萬里の塗を騁せんとす

東路安足由 東路 安んぞ由るに足らん

江介多悲風 江介 悲風多し

淮泗馳急流 淮泗 急流を馳す

願欲一輕濟 願わくは一たび輕く濟らんと欲すれど

惜哉無方舟 惜しい哉 方舟無し

閑居非吾志 閑居 吾が志に非ず

甘心赴國憂 心に甘んじて國憂に赴かん

吳國を仇といい、萬里を騁せて戦いに赴こうとはやる思い。なにごとか出征を阻む事情が、惜しい哉方舟無し、と比喻されてはいるものの、それに悄然とするわけではなく、ここには自らの力を盡くそうとしてほとぼしる熱情がある。

だが、この詩では對象に向かつてまっしぐらの曹植も、

やがては、もはや漂泊と言うよりも翻弄される悲哀と言うほうがふさわしい吁嗟篇のごとき作を生むことになる（次節参照）。

陳琳では、藝文類聚卷二十八人部遊覽により傳わる二首中、「高會時不娛」に始まる詩は、羈客の悲哀をうたって、第五句では、投觴罷歡坐、觴を投げ歡を罷めて坐す、のごとき激しさを示している。が、僅かに残る他の詩をもあわせ讀む限りにおいては、漂泊の哀傷は王粲詩のごとく鮮明ではない。

應場では、侍五官中郎將建章臺集詩（文選卷二十）が、自らを雁に喩えて漂泊の哀傷を述べ、轉じて曹氏に仕えられるようになった喜びと奮勵の決意をうたうもので、主題の基本的性質は、やはり王粲詩と共通する。が、僅かに残る他の詩をもあわせ讀めば、彼の詩は漂泊の哀傷の非常に勝ったものであって、王粲詩ほどには才能活用への強い望みを示さない。

かくて、陳琳、應場は傳わる詩の数の少ないこともあり、我々は、王粲詩の主題が曹植詩のそれと最も類似すること

を確認し得る。<sup>(25)</sup>

以上によって、王粲詩の主題の建安詩中での位置と性質を考えるに、王粲は、王道の推進（曹操が実際に王道の推進者であったかどうかはまた別の問題である）という方向に自己の人生を沿わせた、儒家的實踐的精神に基づく熱情と悲哀の、曹植と並ぶ代表的表現者であったと言い得る。<sup>(26)</sup>

のみならず、そうした主題の徹底性という点では、王粲は建安詩人中筆頭に位するであろう。なぜなら曹植詩においては、以上に述べてきた主題の展開は、彼の詩作の一動脈ではあっても全てを覆うものではないからである。換言すればその詩作は多様であり、徒詩の分野では、雜詩六首中其三「西北有織婦」、其四「南國有佳人」、雜詩「攬衣出中閨」（玉臺新詠卷二、藝文類聚卷三十二人部閨情作魏陳王曹植詩目）等は、いずれも棄婦の悲哀あるいは顧みられぬ美女の悲哀（雜詩其四）を主題として、古詩の模擬繼承作の色彩が濃い（作品の價值評價はまた別の問題である）。假構性の強い樂府に目を轉ずれば、更に多くの棄婦の詩があり、また遊仙の諸作が存する。彼の棄婦の詩の幾らかが、自らの悲哀

王粲詩について（下定）

の寓意であることは十分に考えられるが、それを詩自體のうちに見出だすことは困難である。

これに比べれば、王粲詩は一筋に士大夫としての自己の境涯に關わる問題をうたい續けている。彼の詩にも、古詩の表現の繼承度の高い雜詩「日暮遊西園」、雜詩「聯翩飛鸞鳥」（古文苑卷八、藝文類聚卷九十鳥部鸞作魏王粲詩目）が存する（四章二節參照）。しかしながら、前者については既に見たごとく、詩中に作者が登場して、少なくとも悲哀が作者自身のものであることは明らかであり、後者においても、飛び去りゆく鸞鳥を追おうとするのは、五・六句に、我尚假羽翼、飛觀爾形身、我尚わくば羽翼を假りて、飛びて爾が形身を觀ん、というように、「我」——作者自身である。

即ち、王粲詩においては、古詩の模擬繼承そのものを旨とする作は一篇も傳わっていないのであって、いずれもが士大夫としての自己の思いの表白という様を崩すことがない。<sup>(27)</sup>かくして王粲は、儒家的實踐的精神に基づく士大夫の熱情と悲哀の、建安における最も徹底した表現者なのである。

三〇二

以上は、王粲詩の主題の建安詩中での位置を、その具體性に即して考えてきたのであるが、こうした主題の展開を貫く現實への對應の姿勢を考えれば、また新たな特質が浮かび上がる。

建安詩を古詩と分かつ最大の相違の一つは、彼らの詩が一筋の熱情に貫かれていることである。

古詩の詩人たちが、しとど涙を流して身を細らせ、傷む心のままに老いを待ち、あるいは酒に身を浸して現實の苦艱の前にくびうなだれていたとすれば、建安の詩人たちはたぎる熱情をもって敢然と現實に立ち向かったのである。

そのおおむねは古詩と同じく悲哀のうたであるが、その熱情のゆえに悲哀の性質は古詩と異なり、熱情と現實との激しい摩擦の表現となる。

王粲詩については既に見たとおり。いずれの詩も、その熱情のゆえに、意志と現實との齟齬あるいは距たりは緊張をもつてうたわれているのであり、唯一、從軍詩其五が安

寧への接近を示しているのみである。

曹植の詩は、王粲よりも更に突き詰められた感情を示す。例えば、その贈白馬王彪（文選卷二十四）に、太息將何爲、天命與我違、太息して將に何をか爲さんとする、天命我と違<sup>さか</sup>（其五、一・二句）、と言ひ、また、苦辛何慮思、天命信可疑、苦辛して何をか慮思する、天命信に疑う可し（其七、一・二句）、と言うのは、曹植の悲痛の深さを示す一例であり、運命の無殘を歎いて天に對するこのような表現を示したのは、建安詩人中、彼を置いて無い。

薤露、蒿里、また短歌行「對酒當歌」（宋書樂志三、樂府詩集卷三十）をうたって、建安における最も雄渾な作風を示す曹操。その彼は、盈縮之期、不但在天、盈縮の期、但だ天に在るのみならず（宋書樂志三、樂府詩集卷三十七、步出夏門行四解九・十句）、大人先天、而天弗違、大人天に先んずるも、天違わず（宋書樂志三、樂府詩集卷三十六、秋胡行「願登泰華山」四解五・六句）、とうたい、この語句に限定すれば天をも併呑するかのとき勢いを見せるが、その實は、自己の智力、年命の盡きる時への不安にさらされていることを、

遊仙の諸作は感じさせる（特に前記秋胡行）。曹操もまた、その熱情と一對のものとして、自らの意志によってはいかんともしがたい運命への歎きの表白者なのである。

同様のことは建安の他の詩人についても、それぞれの個性をとおして見出だし得る。しかし、その考察を續けることは本論の課題ではない。

要するに彼らの詩は、そのおおむねが、熱情に對する返禮を現實から受けなかったことを示している。そこには、一面では身に餘る大きな問題を背負って生き續けようとした彼らの姿があり、一面では彼らの意志と努力を超えた現實の苛酷な様相がある。

だから、建安詩が我々に提起する最も大きな問題は、人間の意志とそれを超えた運命という、文學における根底的な課題であり、建安は時代を傾けてこの問いを擔って生きたのである。それは經書、史書をはじめとする他のジャンルにおいても繰り返し問題にされてきたことの詩の世界での展開であるが、直接には古詩が既にはらんでいた問題を、みなぎる熱情と視野の廣がりによって、建安詩はより激

しくより大規模に推し進めたのであり、その眞率さによって、後世よりもずっと單純明快にこの問題を文學史の斷面に現わしているのである。

無論、それらの詩の個々が、意志と運命との關わりそのものを主題としてうたったのではない。建安詩のおおむねが示すのは、なんらかの對象への熱情であり、またそのかなわぬ悲哀である。だが、この問いを潜在させて作られていた建安詩は、遂に少數の、自己と世界とを客觀的洞察の下において、運命の苛酷を主題とする詩作を生み出した。阮瑀の七哀詩はその一つであり、無力な死者の哀痛に託して、彼は自己と世界との關わりを表現した。また轉まよぶよもぎ蓬よもぎに自らを喩え、全二十四句、ひたすらに翻弄され續けることをうたった曹植の吁嗟篇（28）（魏志卷十九陳思王植傳裴注作植常爲琴瑟調歌辭曰、藝文類聚卷四十二樂部樂府、樂府詩集卷三十三、太平御覽卷五百七十三樂部十一歌四作曹植嘗爲琴調歌曰）。阮瑀に比べればその眼はなお自らを離れること少ないが、先に舉げた雜詩其五がひたすら對象へと熱意を向けるのに比べれば、この詩は自己の運命をより客觀的に凝視したものと

なっている。<sup>(29)</sup>

吁嗟此轉蓬 吁嗟 此の轉蓬

居世何獨然 世に居りて何ぞ獨り然るや

長去本根逝 長く本根を去りて逝き

夙夜無休閒 夙夜 休閒無し

東西經七陌 東西 七陌を經<sup>へ</sup>

南北越九阡 南北 九阡を越ゆ

卒遇回風起 卒かに回風の起るに遇い

吹我入雲間 我を吹きて雲間に入る

自謂終天路 自ら天路を終えんと謂うに

忽焉下沈淵 忽焉として沈淵に下る

驚飈接我出 驚飈 我を接えて出だす

故歸彼中田 故より彼の中田に歸するや

當南而更北 當に南すべくして更に北し

謂東而反西 東せんと謂うに反つて西す

宕宕當何依 宕宕として當に何れにか依るべき

忽亡而復存 忽として亡び復た存す

飄緼周八澤 飄緼として八澤を周り

連翩歷五山 連翩として五山を歷<sup>ふ</sup>

流轉無恆處 流轉して恆の處無し

誰知吾苦艱 誰か吾が苦艱を知らんや

願爲中林草 願わくは中林の草と爲り

秋隨野火燔 秋 野火に隨いて燔かれなん

糜滅豈不痛 糜滅するは豈痛ましからざらんや

願與林葉連 願わくは林葉と連ならん

これらの作は、建安の熱情を突き詰めた所に生まれた、建安詩の結論としての位置を持つ。そしてそれは、既に次の時代、阮籍詠懷の詩風への入口に立っていると言えるのである。

王粲の詩作は、その營爲をこうした地點に到らせたわけではない。彼の詩の殆ど全ては熱情の對象を得ぬ悲哀のうたであり、また熱情の噴出のうたである。従軍詩其五が示す現實との融和への接近も、その融和は願望が現實となつたことによって生じているのであり、現實に對して願望を

變容させているのではない。

つまり王粲詩においては、自らの願望そのものに疑いが持たれ、検討の俎上にのせられることは遂に無かった。そして始めにもどって、これこそは建安詩の核心を爲す姿勢であり情調なのであってみれば、王粲詩は建安詩の情調をすぐれて純粹に典型的に示していることになろう。

内容における士大夫性、情調における熱情は、古詩から建安詩への展開の根幹を爲す特性であって、王粲はそのいずれの點にも極めて徹底した姿勢で參與し、建安詩の核心を形成しているのである。

#### 四

以上、王粲詩の主題の特質とその建安詩中での位置を考察してきた。この章では、そうした主題を擔った表現について、従来の士大夫の文學傳統と、古詩・民歌の文學傳統とが、どのように攝取、結合、展開され、どのような新しい世界を詩史に開いたのかを、主として素材の變型に着目しながら考えてゆきたい。

王粲詩について（下定）

建安詩によって、從來民間のものであった五言は、士大夫の文學としての礎を築かれた。だから、この兩者の詩表現における結合と展開の様相、士大夫の詩文學としての達成の度合いを知ることは、建安詩研究における最も重要な課題の一つであるが、なお學界の議論の過程にあり、士大夫性を強調するか、民歌性を強調するか、その振り子は揺れている。本論はこの問題に結論を出そうとするものではない。しかしながら、七子の筆頭たる王粲詩の分析は、この問題に有力な手がかりを提供するであろう。

#### 四の一

その詩が、士大夫の文學傳統より攝取したものととして、私の氣づくのは以下の諸點である。

其の一。詩作の基本的姿勢として、従来の四言詩が、個人の想念の表白であることを引き繼いでいる。従来の五言詩は、ごく少數の詩を除いて、個人の境遇に關わる哀傷の表現ではあっても、個人の想念の表白ではなく、不特定多數の人々の思いの表現となっている。これを變えて、王侯

・士大夫の個人の想念の表白の具とした最大の功績者は言うまでもなく曹操であるが、王粲はこれを、徒詩の分野において徹底したこと既に述べたとおりである。

其の二。語句表現の問題では、彼の全詩作に占める漂泊の悲哀の重さに即應して、漂泊の文學の始祖たる楚辭の言語及び表現の攝取・變型が重要な位置を占めてゐる。<sup>(31)</sup>

その第一に擧げるべきは、悲哀感情を投影する自然表現である。その姿勢は、伊藤氏の言われるごとく（前掲論文）、班彪北征賦、班昭東征賦（文選卷九）、蔡邕述行賦（蔡中郎文集外傳<sup>(32)</sup>）等の姿勢を引き繼ぐが、語句は楚辭を直接に意識するものが少なくなき、七哀詩其二の自然表現は特にそれが著しい。

五・六句、山崗有餘暎、巖阿增重陰、の表現は、類似例を九章涉江、九歎遠逝に見出だす。涉江では、山峻高以蔽日兮、下幽晦以多雨、山は峻高にして日を蔽い、下は幽晦にして雨多し。遠逝の例は一層よく似る。阜隘狹而幽險兮、石嵒嵒以翳日、阜は隘狹にして幽險、石は嵒嵒として日を翳らす。この二例は、日をも蔽い翳らす險阻な地形を表現

しているものであって、日暮の表現ではなからう。しかしながら、漂泊の途次、その哀傷と不安とを一層かきたる險阻、暗鬱な情景という點では、王粲詩の五・六句の創出（その光と影の微妙な把握は楚辭の例を遙かに凌ぐ）を援助していると思われる。

七・八句、狐狸馳赴穴、飛鳥翔故林、は、李善の指摘するごとく、九章哀郢の亂に、鳥飛反故鄉兮、狐死必首丘、鳥は飛びて故郷に反り、狐は死して必ず丘に首う、とあるのに基づく。

九句、流波激清響、については語句は必ずしも一致しないが、九章悲回風に、憚洄洄之礚礚兮、聽波聲之洶洶、涌湍の礚礚たるを憚り、波聲の洶洶たるを聴く。また九歎逢紛に、揚流波之潢潢兮、體溶溶而東回、流波の潢潢たるを揚げ、體溶溶として東に回る。その歎じて曰くの部分には、譬彼流水紛揚礚兮、波逢洶涌潰滂沛兮、譬うれば彼の流水の紛として礚を揚げ、波洶涌に逢い潰として滂沛たるがごとし。かく、波のうねり、激しい水音が土の悲哀感情表現の一モチーフとして楚辭の世界に實現されていること



は確かであり、王粲はこうした表現を背景として九句を創出したものと思われる。

十句、猿猴臨岸吟、も、そのままの語ではないが、九歌山鬼の末尾に、猿啾啾兮又夜鳴、猿は啾啾として又（洪興祖の注に、「又は一に狢に作る」、「狢は猿に似たり」とある）は夜鳴く、のとき表現があり、猿鳴は不安感を引き起こすものとなっている。即ち十句もまた楚辭に先例を持つ表現の變型であって、王粲は、音聲による悲哀表現としての二句を統一したのである。

かく、八句までの視覺表現から、九・十句の聽覺表現へと筆を進めるのは、無論、夕暮から夜への時の推移に對應させるものであろうが、それだけではなく、次第に激する感情を示そうとする意圖も働いていよう。

十一句「迅風」の語は、李善の指摘するごとく遠遊に見えるもの。迅風拂裳袂、白露霑衣衿、の二句全體に類似する表現としては、これもそのままには見出だせないが、九歎逢紛に、裳襜褕而含風兮、衣納納而掩露、裳は襜褕として風を含み、衣は納納として露に掩わる、とあり、王逸は、

王粲詩について（下定）

「單り行きて獨り處り、身寒きに苦しむなり。」と注する。十一・十二句もまた楚辭の語と表現とを合成變型して生み出されたものである。<sup>(33)</sup>

かく、一々の語のそのままの對應は無いとしても、王粲が、楚辭それも特に九章・九歎の漂泊に關わる自然表現を背景としつつ、これらの句を創出していることは疑い得ない（それは、これらの句が實景觀察を通して作られたものである可能性を聊かも否定しない）。

他の詩では、既に述べたように從軍詩其三中段の自然表現もまた、七哀詩其二の中段を轉位變型するものであり、部分的な例としては、雜詩「日暮遊西園」の十一句、風飈揚塵起、は、九思逢尤に、飄風起兮揚塵埃、飄風起りて塵埃を揚ぐ、とあるのに基づく。

但し、從軍詩其五、一句より十二句の戦場の荒涼の表現は、同じく悲哀感情を投影するものであっても七哀詩其二<sup>(34)</sup>ほどの楚辭の語句に密着せず、攝取の對象はさまざまである。

第二に、七哀詩其二、三・四句の、方舟溯大江、日暮愁

我心、の表現は、從軍詩其三にも、方舟順廣川、薄暮未安  
 坻、其五にも、日夕涼風發、翩翩漂吾舟、とあって、船上  
 の漂泊・日暮の哀傷として結びつき、王粲が好んで用いた  
 表現である。そしてこの船上の漂泊・日暮の哀傷は、いず  
 れも楚辭に多くの例を見出だすのであり（舉例の煩を省く）、  
 一篇にこの兩者を含むのは、九章涉江、九歎遠逝である。  
 但し、この二篇ともに王粲のごとく熟した結合を示すので  
 はない。安息すべき日暮に、船上にあって漂泊するという  
 不安と哀傷の表現として二句に凝結したのは、王粲の創意  
 にかかるとのである。

第三に、王粲詩には鸞鳥がしばしば登場し、亂世での漂  
 泊のイメージを高めているが（贈蔡子篤詩、雜詩「聯翩飛鸞  
 鳥」「鸞鳥化爲鳩」、これも楚辭に基づくこと既に述べた。<sup>(35)</sup>

以上三點は、楚辭に基づき、攝取、變型、創造するもの  
 である。

其の三。自然表現ではあるが、上述の悲哀感情の投影と  
 は系統を異にする、歡遊に關わる自然表現があり、公謙詩、  
 雜詩「吉日簡清時」、「列車息衆駕」、また雜詩「日暮遊西

園」の三・四句に見える。その語を検すれば、「葳蕤」（公謙  
 詩二句）、「曲池」（雜詩「日暮遊西園」三句）、「回翔」（雜詩  
 「吉日簡清時」七句）、「幽蘭」（雜詩「列車息衆駕」三句）、「芙  
 蓉」（同上四句）等、いずれも楚辭諸篇に見出だされ、もと  
 をただせばこうした歡遊の自然表現も楚辭に發するが、直  
 接には子虛賦（文選卷七）、上林賦（同卷八）等へと發展精鍊さ  
 れてきた景物描寫を引き繼ぐものである。<sup>(37)</sup>

其の四。首・中・尾という賦の三段構成を導入すること、  
 七哀詩二首、從軍詩其二、其三、雜詩「日暮遊西園」に顯  
 著である。この三段構成が次節に述べる場面轉換のモチー  
 フと結合して、短詩型としてのまとまりを持つ點で大きな  
 効果を擧げている。

## 四〇二

以上のごとく彼の詩の表現は、士大夫の文學傳統をよく  
 繼承するが、古詩・民歌の表現の比重もまたかなり重いも  
 のがある。

其の一。まず擧げるべきは悲哀表現のパターンとしての

場面轉換のモチーフであり、七哀詩其二、從軍詩其三、雜詩「日暮遊西園」の、いずれも中段から後段に、一つの型として自覺されて用いられている。

かく哀傷の極まった時、その環境を變えようとするのは、古詩十九首其十九（文選卷二十九、玉臺新詠卷一作枚乘雜詩）が鮮かに示す手法であり、王粲の場面轉換の表現はこれを有力な素材として攝取するものと思われる。

明月何皎皎 明月 何ぞ皎皎たる

照我羅床幃 我が羅<sup>うすぎぬ</sup>の床幃<sup>しょううい</sup>を照らす

憂愁不能寐 憂愁 寐<sup>い</sup>ぬる能わず

攬衣起徘徊 衣を攬<sup>と</sup>り起ちて徘徊す

客行雖云樂 客行<sup>たひゆ</sup>くは樂しと云うと雖も

不如早旋歸 早く旋歸するに如かず

出戶獨彷徨 戸を出でて獨り彷徨し

愁思當告誰 愁思 當に誰にか告ぐべき

引領還入房 領<sup>うたし</sup>を引ばして還りて房に入る

淚下沾裳衣 淚下りて裳衣を沾す

王粲詩について（下定）

この詩の哀傷表現は、棄婦の行動の追跡を骨格として成り立っており、その行動の變化は、悲哀感情の緊張と、解放への要求との對立交代を表現している。

まず起二句は、月光に照らされて獨りベッドに臥す婦人のシルエットを浮かび上がらせる。彼女は歸らぬ夫を思つて募る憂いに寝ることができず（三句）、その憂いの重苦しさに耐えかね、着衣して部屋を徘徊する（四句）。

さらりとうたわれたこの二句が、二つの要素によつて成立していることを、我々は知る。つまり憂いに沈む心情（緊張）と、憂いの辛さより逃れようとする心情（解放への要求）との二つの要素の對立のモチーフとしてこの二句を捉えることができる。以下、句の篇法はこれの引き續きであつて、部屋を徘徊する彼女の心情は、やはり夫を思つての憂いに向かつていくのであり（五六句）、その憂いにとらわれた環境を再び變えようとして、戸外に出て獨りさまようのである（解放への要求、七句）。だがやはり憂いは除きようもなく、その憂いを外部に向かつて告げようとしても、憂いの重さは誰に告げようもない（解放への要求、同時に緊張そ

のもの、八句)のであり、彼女はひとときの葛藤を終えて部屋に歸り、いかんともしがたい切なさに、涙をとめどなく流すのである(疲勞と緊張、九十句)。

かくこの詩は、憂いによる緊張と、憂いからの解放への要求との二つの感情要素の對立交代を、場面の轉換を軸とした行動の變化に託すことによって、夫の歸還を待ち望む妻の悲しみを描出しているのである。

この表現手法の基本において、王粲の七哀詩其二、雜詩「日暮遊西園」、從軍詩其三の中段から後段は、いずれもこれを引き繼いでいる。

また、これらの詩の語句には左記のような類似關係がある。上段は古詩十九首其十九の、下段は王粲詩の句である。數字は第何句かを示す。

憂愁不能寐(3) ↓ 獨夜不能寐(七哀詩13)  
愁思當告誰(8) ↓ 此愁當告誰(從軍詩14)  
引領還入房(9) ↓ 迴身入空房(雜詩13)  
淚下沾裳衣(10) ↓ 白露沾衣衿(七哀詩12)

↓ 草露沾我衣(從軍詩12)

上段の「ねられない」、「誰に告げようもない」、「部屋に歸る」、「涙で着物が濡れる」等の表現は、無論其十九以外の古詩にも多く見られるのであるが、其十九は最も多くの類似表現を含む。かつ場面の轉換を設定するのは、漢代の詩の中では其十九と、李陵作として傳わる「晨風鳴北林」(藝文類聚卷二十九人部別上、古文苑卷八)が部分的にそうであるのとどまる。<sup>(39)</sup> 王粲は其十九の場面轉換に關わる句を中心としつつ、古詩が得意とする悲哀の身振りの表現を隨處に配置したのである。

其の二は、同じく悲哀の身振りの表現としての鳥を追う、あるいは鳥に従うモチーフの攝取であり、雜詩「日暮遊西園」、「聯翩飛鸞鳥」に見られる。

この發想に最も類似するのは、古詩の中では、李陵作として傳わる「有鳥西南飛」(古文苑卷八、太平御覽卷八一四綵)および「晨風鳴北林」である。「有鳥西南飛」の末四句は次のごとくであり、

鳥辭路悠長 鳥辭す 路悠かに長し

羽翼不能勝 羽翼 勝うる能わず

意欲從鳥逝 意 鳥に従いて逝かんと欲するも

驚馬不可乘 驚馬<sup>どば</sup> 乗る可からず

自己の思いを傳えんが爲に鳥を追おうとするストーリーの骨格を類似させる。

「晨風鳴北林」の七句より十句は次のごとくであり、

玄鳥夜過庭 玄鳥 夜庭を過ぐ

髣髴能復飛 髣髴として能く復た飛ぶ

褰裳路踟躕 褰<sup>もすて</sup>裳<sup>か</sup>を褰げて路に踟躕<sup>ちちゆ</sup>し

彷徨不能歸 彷徨して歸る能わず

これは燕の飛翔の能力を羨望するのであるが、後の二句は、雜詩「日暮遊西園」の七句より十句、褰衽欲從之、路

嶮不得征、徘徊不能去、佇立望爾形、に似る。

また次の古絶句（玉臺新詠卷十）、

王粲詩について（下定）

南山一樹桂 南山に一樹の桂

上有雙鴛鴦 上に雙<sup>つがい</sup>なる鴛鴦有り

千年長交頸 千年 長えに頸<sup>とし</sup>を交え

歡慶不相忘 歡慶 相い忘れず

のごときは、やはり雜詩「日暮遊西園」の五・六句、上有特棲鳥、懷春向我鳴、と、方向は異なってもイメージは同じ世界のものであり、「交頸」の語は、雜詩「聯翩飛鸞鳥」の七・八句、願乃春陽會、交頸遭殷勤、願わくは乃ち春陽の會に、頸を交え遭うこと殷勤ならん、にも見える。

これらの詩は、時代の先後が不分明であって王粲が依據しているとは断定はしがたいが、古詩の系統の表現であることはほぼ疑いないであろう。<sup>(40)</sup>

其の三は、樂府古辭における民衆の苛酷な現實の表現の攝取變型である。これは、今日傳わるものでは、七哀詩其一中段の、飢えた婦人が子供を棄てるという情景だけである。この中段は王粲の現實觀察から生まれている可能性が十分にあるが、その表現への定着にあたっては、樂府古辭

の達成している迫眞性が大きく貢獻していよう。

### 四の三

以上を要するに、公讌詩および歡遊を内容とする雜詩「吉日簡清時」、「列車息衆駕」等は、漢賦の景物描寫の成果を導入し、從軍詩は、基本的には征賦の素材の移植であり、これらの詩については、大略、賦の世界の五言詩への移入であると言える。

しかしながら、悲哀のうた及び悲哀表現は、かく單純ではない。

七哀詩其一是、班彪北征賦を土臺として、樂府古辭の現實描寫と經書（春秋左氏傳、詩經）に見える高い理念を含む表現とを融合展開したものであり、他は、楚辭および北征賦、東征賦、述行賦等の悲哀感情を投影する自然表現の語句と姿勢を引き繼ぐ一方、それを古詩の得意とした悲哀の身振りの表現と融合して展開する（悲哀の身振りの表現は、詩經、楚辭ともに豊富に含むが、漢代の賦、四言詩はいずれもさしたる展開を見せない。これを精鍊驅使したのは古詩の一群である）。

こうして見てくれば、王粲の諸詩は、それぞれの主題に應じて、從來の中國文學の傳統の最も優れた部分を攝取していることに氣づく。

そして、これらの表現を一括して一言で言えば、具象表現ということであり、これら具象表現の周到な配置によって、彼の詩は從來の四言にも五言にも見られない新しい地平を中國詩史に切り開くものとなった。

漢代の四言詩は、詩經の含んでいた豊富な具象表現を發展させる方向には向かわず、むしろ士大夫の想念を抽象度の高い理念的表現に託す傾向のあったこと、例えば韋孟の諷諫詩（漢書卷七十三、文選卷十九、藝文類聚卷二十四人部諷諫）、在鄒詩（漢書卷七十三）、韋玄成の自劾詩、戒子孫詩（漢書卷七十三）等の漢代四言詩の代表例、また最も近い先例では、師蔡邕の贈答詩、答對元式詩、答卜元嗣詩（藝文類聚卷三十一人部贈答、おそらく斷片）等によって確認し得る。

ところが王粲詩は四言の詩において既にそうでなく、具象表現に富む傾向を示す。

例えば、贈蔡子篤詩を見るに、一・二句の翼翼たる飛鸞、

載ち飛び載ち東す、のとき映像の鮮明な視覚的表現（鸞<sup>42</sup>）

が想像上の鳥であることは問題でない）、五・六句、舫舟翩翩と

して、以て大江を<sup>さかのぼ</sup>る、のとき、これは五言にも導入

された船上漂泊の舞臺裝置、あるいはまた十九・二十句に、

廻き路を<sup>あお</sup>望み、允に企ちて伊に<sup>たふす</sup>佇むのみ、<sup>（43）</sup>のとき、

王粲自身の姿を髣髴させる表現。これら具象性の高い表現

によって、この詩における離別と漂泊の哀傷は誠に切々た

るものになっている。贈士孫文始もまた事情は同じである

（だから王粲は四言詩史の上でも従来の表現を革新していると言

えよう）。そしてこの傾向は、無論五言において一層著しい。

一方、従来の古詩・民歌は、第一に、王粲詩のごとき個

人の想念の表白ではないこと、既に述べたとおりであり、

第二に、その具象表現を比較すれば、悲哀の身振りの表現

は、古詩による所が大きいとしても、悲哀感情を投影する

自然表現は、古詩のそれを王粲詩が遙かに凌いでいる。

以上を要するに、彼の詩作は自らの想念を豊かな具象表

現に託してうたうことにより、士大夫の個性表現としてか

つてない立體的全圓的なものとなったのである。

王粲詩について（下定）

その詩表現の特性は、かく士大夫の文學傳統と、古詩・

民歌の文學傳統との融合展開の相にこそ見なければならな

いのであって、いずれに偏しても、その特徴を見失うこと

になるであらう。<sup>（44）</sup>

そして王粲詩に見られるこの表現の構造もまた、詳論は

他日を期すが、建安詩全體の根幹を爲す特性であり、王粲

は、主題、情調、作詩法——これらいずれの點から見ても、

建安文壇の指導的詩人として、後の士大夫の詩文學に巨大

な礎石を置いたのである。

注

（1）魏志は王粲傳を獨立させて編み（卷二十一）、他の五人、

即ち徐幹、陳琳、阮瑀、應瑒、劉楨の傳は、これに付すとい

う體裁をとる。なお文帝が以上の六人と孔融とをあわせて七

子と稱したこと（典論論文）に、建安七子の呼稱は發するが、

孔融は建安文壇には參加していないので、本論文ではひとま

ず考察の対象から省いている。

（2）王粲詩二十六首、逸句、詩題のみ傳わるものの出所にっ

いては、中國文學報第二十冊、伊藤正文氏「王粲詩論考」の

注⑥を参照されたい。なお氏は、顔氏家訓文章篇に、贈楊德

祖詩の逸句「我君餞之、其樂洩洩」が傳わることを發見されている。以下、作品の出所の記載は、鈴木修次氏「漢魏詩の研究」に負う所が大きい。

(3) 李善注に、「遘は構に同じ、古字は通ずるなり」とあるのに従う。

(4) 初平三年（一九二年）六月より、董卓の部將李傕・郭汜らが王允を誅殺して長安を支配した。王粲の長安脱出は、初平四年（一九三年）王粲十七歳の時。彼は初平元年（一九〇年）には董卓の長安遷都に従って洛陽を離れており、都を棄てること二度目である。

(5) 初平四年（一九三年）、長安を去って荊州に身を寄せはしたものの、劉表は王粲を重用しなかった。以後、建安十三年（二〇八年）曹操の幕下に身を投ずるまで足かけ十六年にわたる沈鬱な歲月が続く。

(6) 古文苑は風雪に作る。藝文類聚に從う。

(7) 一句の句づくりは禮記月令仲春之月に、「鷹化して鳩と爲る」とあるのに基づくが、鷺鳥、鳩の二語は、四句の鷺鳳とともに、全て楚辭に見えるから、楚辭の用法をひきついでいる可能性が強い。鷺鳥、鳩の解釋はいずれも離騷の用例に基づく。この二句には自嘲的な響きがある。五・六句と對應して曹操に對して自己を卑下する意識も働いているかも知れない。

(8) 王逸の離騷經の序に、「虬りゅう龍鸞鳳は以て君子に託す」

とある。

(9) 「受性」は、大雅蕩之什桑柔第十二章の句、「維彼不順、征以中垢」の鄭箋に、「賢者朝に在りて、則ち其の善道を用う。不順の人は、則ち行い闇冥し。性を天に受けて、變う可からざるなり。」とあるのに基づく。 「閑」は、秦風驕驍第三章の句「四馬既閑」の毛傳に、「閑は習なり」の訓がある。韻の關係で「順」の字と意の相似る「閑」の字を用いたものと考え、本文のごとく解釋する。

(10) 邶風泉水に、「以寫我憂」の句があり、毛傳が、「寫は除なり」というのに従う。

(11) 曹植の作でも、孤り哀しく鳴く鴛鴦が登場し、李善は、「鴛鴦は榮を喩う」と注する。従って王粲の作の「特棲鳥」は、曹植を喩えると考ええる。

(12) この二首は、全く遊覽の歡樂を述べたうたであり、曹丕や曹植の遊覽の詩と比較して、特に王粲の詩作の中に位置づけてみると、公謙詩や從軍詩其一、其二、其四に見られるはりきったところも無く、其三に見えるような複雑さも無い。その榮しくはれやかな情調は、一時の歡樂と、人生をふりかえっての安寧という違いはあるけれども、從軍詩其五後半の情調につながっていくものである。

(13) 其一是、魏志武帝紀建安二十年の張魯征伐の項の裴注に錄されており、李善も武帝紀本文及び裴注をまとめて其一の



事項注とし、他の四首に對しては、魏志王粲傳に基づいて、「建安二十一年、粲征吳に従ひ此の四篇を作る」と注する（製作年については問題の残ること、注(21)を参照）。

なおこの他にも、王粲從軍詩其二に李善の引く、「被羽在先登、甘心除國疾」及び太平御覽卷三百五十一兵部戈に、「樓船凌洪波、尋戈刺群虜」の逸句二例が傳わり、少なくとも七首以上の從軍詩を作っていたことになる。

(14) 論語先進に、「今由と求とは具臣と謂うべし」。孔安國の注に、「臣の數に備わるのみなるを言う」とある。

(15) 許歷は戰國の軍士。史記卷八十一の趙奢傳に見える。「完士」は、李善が、「完は全て具わるを謂う。言うところは奇有るに非ざるなり。」というのでよいと思う。

(16) 魏風伐檀に、「坎坎として檀を伐り（中略）、彼の君子は素餐せず」とある。

(17) この二句は李善注本には無く、六臣注本にある。

(18) 孔叢子の記問に、孔子が趙簡子の聘を辭して、退居のおもいを述べるうたが傳わる。「孰」は「熟」に同じ。

(19) 論語憲問に、「利を見ては義を思い、危うきを見ては命を授く」とある。命を投げ出すこと。

(20) 尚書咸有一德の句「克享天心」の傳に、「享は當なり」とあるのを李善が引くのに従う。

(21) 私はひとまず李善の説に従って論を進めたが、其二以下の四首が建安二十一年の作とは斷定しがたいこと、松本幸男

王粲詩について（下定）

氏が、「建安詩壇の形成過程について」(一)（立命館文學第一八六）で考證されている。從軍詩其五は、東征より誰に還るといふ旅程であり、季節は秋である。旅程の點だけで言えば、建安十四年、二十一年の東征がこれに合致するが、季節の點ではいずれも對應に難がある。十二月に誰に還った十四年よりは、十一月に還った二十一年の方が條件に近いという程度のことしか言えないであろう。王粲は建安二十二年春四十一歳で亡くなるのであるが、假に二十一年の作でないとしても、主題の基本的性質についての私の論旨には影響しない。

(22) 「人を儼ぶるは必ず其の倫に於てすの義に非ざるに似たり」（葛立方、韻語陽秋卷四）、「春秋誅心の法より、二三（王粲、劉楨）其れ何ぞ逃れんや」（嚴羽、滄浪詩話詩評）とあるように、曹操を周公に比べたり、聖君と呼ぶことを批判している。

(23) 賦では初征賦（藝文類聚卷五十九戰伐）もまた流寓の時期の苦しみを、「世の難を達けて以て迴折し、超遙として蠻楚に集う。屯否に逢いて底滯し、忽として長幼以て羈旅す。」と述べた上で、征旅に従う興奮をうたう。

(24) 徐幹の今日傳わる詩は、僅かに三首または四首（爲挽阮士與新娶妻別を、玉臺新詠卷二は文帝作、藝文類聚卷二十九人部別は徐幹作とするため）であり、答劉公幹詩（藝文類聚卷三十一人部贈答）を除けば、情詩（玉臺新詠卷二）、室思（同上、藝文類聚卷三十二人部閨情。今丁福保に従い一首と

しておく)は、共に古詩における棄婦の哀傷をひきつぐ。

(25) 同じく三良の故事を題材とした王粲の詠史詩、曹植の三良詩(共に文選卷二十一)は、兩者の理念の類似を見ることのできる好例の一つである。そのことは、阮瑀の詠史詩との比較で、簡單ではあるが既に觸れた(拙稿前掲論文)。

(26) 早く、沈約が、謝靈運傳論(宋書卷六十七、文選卷五十)に、「子建・仲宣は氣質を以て體と爲す」と述べて兩者の類似を認めている。

(27) 王粲の今日傳わる樂府作は、宗廟歌辭もしくはその系統に屬するもので、これは完全に士大夫の世界のものである。

(28) 引用は魏志による。

(29) 裴松之は、本傳の太和六年の項、「十一年中にして三たび都徙り、常に汲汲として歡び無し。遂に病を發して薨す。時に年四十一なり。」とある本文の次にこの詩を引用する。

古直もこれを擧げて(曹子建詩箋)、太和三年東阿に従つて後の作とする。正確な年代は決めたがたいが、この詩が曹植最晩年の作であることは、ほぼ疑いないものと思う(曹植の没年は太和六年西曆二二三年)。

なおよく知られているように、雜詩六首中其二は吁嗟篇とほぼ同主題である。但し、吁嗟篇の方が寓意詩としての展開の點では徹底している。詩と樂府との相違は當然考えねばならないが、自己の對象化の度合いは吁嗟篇の方が進んでいる。

(30) 古詩といえども知識人の潤色を経ていることは既に定説であり、嚴密にはその檢討をふまえた比較が必要であるが、本論ではそこまでたちらない。

(31) 詩經の語句表現の攝取は無論無視しえないが、王粲の場合、楚辭の重要性の方がずっと高い。

(32) 古文苑卷二十一、藝文類聚卷二十七人部行旅にも傳わるが斷片。

(33) 但し、十二句の表現は、蘇武作として傳わる「雙鳧俱北飛」(藝文類聚卷二十九人部別上、古文苑卷八)の八句、不覺淚霑裳、覺えずして淚裳を霑す、古詩十九首其十九の十句、淚下沾裳衣、淚下りて裳衣を沾す、等の古詩の句づくりを借りて變型するものである(四章二節參照)。

(34) 全體の姿勢は、北征賦、東征賦等をひきつぐものとみてよい。語句について、李善の擧げるものの出所のみを記せば、小雅魚藻之什黍苗(一句悠悠の典故、以下同じ)、王風黍離(二句靡靡)、東觀漢記卷二十四逸文(三句、從軍詩及び卷三十八傅季友爲宋公至洛陽謁五陵表の句「鷄犬罕音」の李善注引東觀漢記の二條を校合して録す)、禮記月令(十一句寒蟬)、古歌烏生八九子(十二句)等である。他にも、古詩十九首其十四の、「但だ丘と墳とを見るのみ」(四句)、東征賦の、「蒲城の丘墟を賸るに、荆棘の榛榛たるを生ず」(五句)等は、意識した可能性のあるものとして擧げててもよいだろう。七・八句は私の檢する限り、特に典故を見出だせない。伊藤

氏の言われるように（前掲論文）、實景觀察に基づく創句であらう。九・十句は本論に述べるように楚辭より創出されたもの。

(35) 「鸞」はもと楚辭に發し（詩經に見える鸞は、馬車のくつわにつける鈴の意であり、鳳凰は見えるが鳥としての鸞は登場しない）賦には多用されてきた語。

(36) 「葳蕤」は七諫初放に、「上は葳蕤として露に防かまわる（王逸注に、防は蔽なり、とある）。「曲池」は招魂に、「堂に坐し檻に伏し、曲池に臨む」。「回翔」は九歌大司命に、「君迴翔して以て下る」。「幽蘭」は離騷に、「幽蘭を結んで延佇す」。「芙蓉」は招魂に、「芙蓉始めて發く」のごとき例を見る。特に招魂は遠遊する魂を招こうとして、楚國の居室飲食音楽美女等の樂しみを述べる中で別荘の美觀の一部として自然美をもうたい、歡遊に關わる自然表現の源である。

(37) 上林賦の「芳を吐き烈を揚げ、郁郁菲菲として、衆香發越す」、「紅華を發し、朱榮を垂る」のごとき表現は、それぞれ「幽蘭吐芳烈」（雜詩「列車息衆駕」三句）、「列樹敷丹榮」（雜詩「日暮遊西園」四句）の語句に似る。

また同系統の表現の代表的な例として、曹丕の芙蓉池作（文選卷二十二）は、子虛賦、上林賦、西京賦（文選卷二）、羽獵賦（同卷八）等の表現を攝取するものであること、李善が明らかにしている。この類の表現の評価については、小尾郊一博士著「中國文學に現われた自然と自然觀」第一章第二節、

王粲詩について（下定）

また伊藤氏前掲論文を参照されたい。私の考えは兩氏の説を超えない。

(38) 鈴木虎雄博士著「賦史大要」第三篇第五章、賦の結構形式、を参照されたい。

(39) 場面轉換のモチーフの例は、楚辭に一例、「涕泣交わって凄凄たり、思うて眠られずして曙に至る。長夜の曼曼たるを終え、此の哀しみを掩えど去らず。寤めて從容として周流し、聊か逍遙して自ら恃たもしむ（王逸注に、内自ら娛しむなり、とある）。「九章悲回風」とあるのに發し、私の見る所、漢賦では長門賦、樂府古辭では傷歌行（但し、この二作は注(40)に述べるように問題がある）、古詩ではここに挙げた二例のみである。しかし建安詩では激増して、曹丕の雜詩「漫漫秋夜長」（文選卷二十九）、曹植の贈王粲、徐幹の室思など十指を優に超える。

(40) これらの他にも、司馬相如作として傳わる長門賦（文選卷十六）、樂府古辭傷歌行（文選卷二十七、玉臺新詠卷二、藝文類聚卷四十二樂部樂府、樂府詩集卷六十二）は、いずれも鳥を追う棄婦（傷歌行には棄婦であるとはっきり示す語は無いが）という狀況を設定して、雜詩「日暮遊西園」に似る。但し、前者は、顧炎武日知錄卷十九假設之辭に、「長門賦云う所の陳皇后復た幸せらるるを得は、亦た本より其の事無し」、また義門讀書記文選卷一に、「司馬長卿長門賦、此の文は乃ち後人の擬する所にして相如の作に非ず。其の詞細麗、蓋し

平子（張衡）の流なり。」とあって、まず擬作である。後者も玉臺新詠では魏明帝作とする（但し文選所載のものと語は若干異なる）。もし建安以前のものであれば、兩作とも王粲の意識した可能性は十分に考えられるが、その點は分からない。しかしながら、悲哀に關わる鳥のモチーフを大きく見た時、詩經・楚辭に見える祖型を發展させて、鳥に關する様々なモチーフ（鳥となつて睦みあいたい—この表現が古詩では最も多い、鳥となつて高く飛びたい、翼の無いのが悲しい、鳥に言を託す等）を精鍊驅使するのは古詩（若干の樂府古辭を含む）の一群であり、漢代の賦はこれを殆ど發展させない。従つて王粲詩の鳥を追う表現も、大筋は、古詩をひきつくと見てよいと思われる。

(41) 七哀詩其二、從軍詩其三および其五の悲哀表現、雜詩「聯翩飛鷺鳥」を指す。雜詩「日暮遊西園」については、注(39)、(40)に述べたように長門賦を意識した可能性を考慮に入れておく必要があり、他にも、十四句「託夢通精誠」については、「魂は覺<sup>は</sup>亮として神と交わり、精誠は宵寐に發す」（文選卷十四班固幽通賦）、「夜夢に託して以て靈と交わらん」（藝文類聚卷十八人部美婦人その他、蔡邕檢逸賦）のごとく十六句「何懼不合并」については、「愛獨り結ばれて未だ并わず」（同上）のごとき、發想を類似させる賦の先例があり、美女をうたった賦、失寵の賦を中心とした賦の語句表現の影響を無視できない。

(42) これは、小雅鹿鳴の什四牡の「翩翩たるは雛、載<sup>こはと</sup>ち飛び載ち下る」のごとき表現と、楚辭の世界に飛ぶ鷺、および離騷に、「高く翺翔して翼翼たり」とある表現とを合成變型する。

(43) これは、邶<sup>は</sup>風燕燕の、「瞻望するも及ばず、佇立して以て泣く」および衛風河廣の、「跂<sup>こはと</sup>ちて予之れを望む」の表現を合成變型する。

(44) 鈴木修次氏の「建安詩を方向づけるもの」（前掲誌）は、建安詩が漢代の民間歌曲歌辭の強い影響下にあるものとする代表的な論文である。

氏は、それを曹丕の詩を中心にすえて論じ、その中で七哀詩其一についても觸れながら、結論部分で、「曹丕、および曹丕をめぐる周邊の文人たちの作品も……中略……その抒情は、いわば歌曲歌辭などで方向づけられ、ならされてきた抒情で、そこにはまだ個性的な詩的主觀の確立を見ることはできないように思われる。」と述べられる。しかし、そもそも曹丕の五言詩は、建安詩人中、徐幹の作と共に最も古詩・民歌的色彩の強いものであって、これをもって建安詩の全體を覆うことにはやはり無理がある。

また、氏は、「漢魏詩の研究」中の王粲論で、「詩人としての王粲は、曹丕の線にたつらなるところの感傷詩人であるといえる。」と述べられる。確かに、王粲詩の悲哀表現や觀遊の清冽な情景描寫には、曹丕と似る所があるけれども、問題

はこうした表現が王粲詩全體の中に占める位置であり、その悲哀の性質は、曹丕のそれと必ずしも共通するものではない。「文秀ずるも質<sup>ふ</sup>羸<sup>し</sup>」(鍾嶸)という評もあれば、沈約の評(注(26)参照)のあることも忘れてならないのであり、王粲詩には、どちらの見方も生じさせる要素がある。

伊藤氏の「王粲詩論考」は、王粲詩の専論として誠に緻密なものであり、多大の御教示を受けた。但し、氏の場合、逆に古詩・民歌の表現の攝取については、その評價は過少と思われる。

補　楚辭の引用は洪興祖の補注本に據った。